

新制

人

106

学位審査報告書

（ふりがな） 氏名	うえもと ゆういちろう 上本 雄一郎
学位（専攻分野）	博士（人間・環境学）
学位記番号	人博 第 430 号
学位授与の日付	平成20年11月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 共生人間学専攻
(学位論文題目) 『霊界物語』に見る大本教の民衆性 — 出口王仁三郎の近代批判 —	
論文調査委員	主査 教授 高橋 義人 副査 教授 ベッカー, カール 副査 教授 田邊 玲子 副査 教授 鎌田 東二

人間・環境学研究科

氏名

上本 雄一郎

(論文内容の要旨)

本学位申請論文は、大本教の「聖師」と呼ばれる出口王仁三郎(1871-1948)の大著『靈界物語』(全81巻83冊、100字詰原稿用紙約10万枚)の研究を基礎とし、「笑い」や「言霊論」や「変身」といった独自の視点から彼の著述や活動の総体を包括的に検討することにより、出口王仁三郎を特徴付ける身体性・民衆性の具体的にして詳細な考究を試みた宗教学的論考である。

序論では、『靈界物語』は大本教の聖典というべき重要な著作であるにもかかわらず、これを軽視し、文献学を蔑ろにした研究が大本教の研究史の大勢を占めてきたことが指摘され、それだけに『靈界物語』の読解に本格的に取り組んだ本論文の意義が説かれる。次いで本論文の骨子をなす『靈界物語』の民衆的性格が概観される。周知のように大本教は、二度にわたる大本事件により執拗な弾圧を受け、大本から出版される文書は嚴重な検閲に付された。検閲の眼を逃れるため、王仁三郎は『靈界物語』の口述筆記に際しても細心の注意を払い、その文章には偽装と粉飾が施されている。そのため『靈界物語』を真に理解するには、そうした背景を踏まえた上での精緻な文献学的アプローチが必要であり、それを行ったのが本論文であると主張される。

序論に続く第一章から第四章では、王仁三郎の身体論を通して、彼の説く宗教の民衆的性格が浮き彫りにされる。

第一章では、「笑い」という観点から『靈界物語』が取り上げられる。本章ではまず、当時の大本教に存した、教祖と信徒の間の親密な雰囲気概観され、次いで『靈界物語』に収められた屁に関する川柳や笑話、『誹風柳多留』や昔話「屁ひり嫁」という民衆文芸からの強い影響の下に、「民衆の身体性」を浮かび上がらせている点が指摘される。また、そこで試みられている「ことば遊び」のいくつかは、「地口」、「しゃれ」、「舌もじり」、「物づくし」、「折句」に分類・整理され、生活世界に生きる笑いを王仁三郎が重視していたことが強調されている。他方、『靈界物語』では大本教固有の祝詞や祭儀の中心に位置する「聖なるもの」がもじりの題材となっていると指摘され、彼における「聖なるもの」を相対化する眼差しが、じつに巧妙に国家神道体制にも向けられ、ひそかな国家神道批判になっていると論じられている。

第二章では、大本教団の行法である「み手代お取次ぎ」や「鎮魂行法」の原型、すなわち『靈界物語』に描き出されている「鎮魂」が取り上げられる。ここでは王仁三郎の「言霊論」の帯びる身体性を究明することにより、民衆の生活世界と連続する彼の一面が明らかにされる。「鎮魂」は人間の声音、身体部位としては臍下丹田を重視するものであり、斎藤孝の言う伝統的な「身体文化」、すなわち「息の文化」や「ハラ文化」を体現したものである。このような側面を、学界に流布する「(霊=術)系新宗教」という概念によって把握することは難しい。うたう行法としての「鎮魂」に看取できるのは「身体性」であり、身体性と霊性を調和させることにより他者を清める業が「鎮魂」であるとされる。

第三章の主題をなしているのは、王仁三郎の変幻自在な扮装のパフォーマンスである。特に女神に変装している姿が目を引くが、それは、「両性具有」を目指す大本教の教えの実践であるのみならず、王仁三郎が自らの身体的特徴を最大限に生かそうとする、身体論的な試みでもあった。一見すると奇妙に見えるこのパフォーマンスの背景には、彼固有の内的な論理が存在した。本章では、『靈界物語』で展開された主神論(根源神論)を読み解きながら、自らを主神の顕現であるとする認識が王仁三郎の変身パフォーマンスの背景にあったと断じられている。と同時に、繰り返し提示された彼の一連の変身像が、身体性を通して信徒に訴えかける教義であり、一般信徒にとっていかに親しみやすいものであったかが考究されている。

以上の出口王仁三郎の身体論を踏まえた上で、神学編とでも言うべき第四章ではいよいよ、『靈界物語』で展開された王仁三郎の「月の神学」が取り上げられる。王仁三郎は、月を主題化し、満月をシンボルとする「三五教」の統括者として、「救世主神」スサノヲを描き出す。『靈界物語』には、国家神道および大本開祖・出口ナオ(1837-1918)の権威を超克しようとする彼の意図のみならず、「日の神学」にほかならぬ国家神道の神学とは根本的に異質な「月の神学」に拠る大本教の信仰の独自性が示される。本章ではまた、王仁三郎の詠う月が、民俗社会に生きる月神の霊

水信仰や伝統的な美意識ともつながり、民衆的な性格を有することが明らかにされる。

本学位申請論文で究明が試みられているのは、身体性を介在する王仁三郎と民衆の「生活世界」の接点であり、大本教の有する民衆性の具体相である。王仁三郎は、国家神道を巧妙な仕方で批判していく半面で、国家神道やナオの教説には見られない、民衆にとっての具体的で実感できるものを大本教の運動を通じて次第に前景化させていった。このような身体性と民衆性を出口王仁三郎はいかに推進しようとしたか。その具体的過程を生き生きと明らかにしようとしたのが本博士申請論文である。

氏名	上本 雄一郎
----	--------

(論文審査の結果の要旨)

大本教の「聖師」とされる出口王仁三郎の浩瀚な主著『霊界物語』(全81巻83冊)は、王仁三郎がトランス状態のまま口述したものを、傍らで筆記させることで著したもので、文体は平明であるものの、内容が茫漠としており、一見すると掴みどころがないという感を受ける。そのため『霊界物語』を無視して王仁三郎について論じることはできないはずであるにもかかわらず、これまでの出口王仁三郎研究では『霊界物語』の存在が軽視されたり、きわめて独善的・一面的な王仁三郎像が提起されたりすることが多かった。

学位申請者はこの『霊界物語』と長年にわたって取り組み、王仁三郎がこの大著において本当に言おうとしたことは何なのかを、いくつかの視点にもとづいて再構成しながら生き生きと浮かび上がらせており、本研究によって初めて出口王仁三郎の全貌が明らかになったと言っても過言ではない。彫琢された文章も見事で、筆致には説得力がある。とりわけ第一章の「からだを開く笑い」や第四章の「日の神学か月の神学か」は、本論文の白眉であり、これまで誰も指摘しなかった独創的な指摘に満ちている。この独創的にして透徹した深い解説が、本研究の特筆すべき第一の長所である。

周知のように国家神道を批判する大本教は、1921年の第一次大本事件と1935年の第二次大本事件によって、日本の宗教史上でも稀な徹底した弾圧を受けた。そのため王仁三郎は『霊界物語』の文体にも多くの偽装と粉飾を加え、検閲の眼を逃れようとした。したがって『霊界物語』の解説に際しては、これらの偽装と粉飾を丹念に払拭する必要がある。申請者は多大の忍耐を要するこの作業を見事にやり通している。文献学的な緻密さと正確さが、本研究の第二のすぐれた長所である。

以上の2つの長所を備えた本博士申請論文は、出口王仁三郎研究史上に新しい頁を画する画期的な研究となっている。調査委員の一部からは、本論文はわが国の出口王仁三郎研究のなかでも10指に入る、いや5指に入るのではないかとまで絶賛する声が上がった。しかも本論文は、単に読みごたえがあるのみならず、きわめて説得力のある重厚な論考ともなっており、本学位申請論文が上梓され、一般に読まれるようになれば、王仁三郎や大本教の持つ重要性は世間で広く知られるようになるものと期待される。

本学位論文に関しては、本研究科の調査委員3名に、出口王仁三郎研究にかけてはわが国随一の他研究科の調査委員1名が加わって綿密な審査が行われた。当初提出された論文に基づいて計3回の調査委員会が開かれ、特に第一回目には申請者に対して大幅な改稿が求められた。改稿によって序論は完全に一新され、論文にはさらなる磨きがかけられた。平成20年10月9日、論文内容とそれに関連した事項について公聴会を開催し試問を行った。そこで調査委員は本論文の持つ画期的な意義を認めた上で、今後、申請者が学者として一人立ちしていくために重要であると思われる以下の諸点を忠告として指摘した。

1) 本学位申請論文は宗教の民衆性をテーマにしている。宗教学におけるこのきわめて重要なテーマを今後扱っていくには、民衆のさまざまな側面(社会階層における民衆、民衆と支配者との関係、大衆文化における民衆など)を分けて考察すべきだろう。

2) 民衆性に関しては、出口なお(1836-1918)の民衆性も無視するわけにいかない。たとえば出口なおの描いた掛け軸には、民衆の考える神がアニミズム的なレベルで表されており、非常にインパクトが強い。今後、出口なおの民衆性と比較しながら、出口王仁三郎の民衆性を研究することも考えられる。

3) 論文には現代的意義がなければならない。王仁三郎と現代とでは時代が明らかに異なるので、王仁三郎が言っているような「民衆」が今日でもはたして存在しているかどうかを検討してみる必要がある。少なくとも表面的に見れば、出口王仁三郎の念頭にあったような素朴な民衆は今日きわめて数少なくなった。しかし都市文明の魅力に捉えられ、素朴な民衆性を忘れてるように見える大衆のなかにも、出口王仁三郎の考えた素朴な「民衆性」はまだ残っているはずで、本学位申請論文の後には、「宗教と民衆性」を基軸にしながら研究対象を比較宗教学にまで拡大し、

宗教と民衆性の関係を、空海・最澄の時代から一向宗を経て今日にいたるまで深く捉え、かつそれをキリスト教やイスラム教などの世界宗教と比較してみたらどうか。それは申請者のライフワークとなるだろう。

4) 本論文は先行研究の多くに対する強い批判を含んでいる。そのため本学位申請論文が出版されれば、反論に会うことが予想される。学問において論争は不可欠であり、論争を前にしてたじろぐことのないような心構えを持ってほしい。

5) 本学位申請論文において紹介されている出口王仁三郎の男神や女神へのさまざまな「変身」の写真は多くの読者にとってきわめて興味深いものである。一部から偶像崇拜という批判がなされているにもかかわらず、イエス・キリスト像やマリア像、あるいは仏像がキリスト教や仏教にとって不可欠だったのは、宗教は言葉によるよりも、まずイメージを通して信徒に訴えかけなければならなかったからであろう。宗教における両性具有や聖なるイメージも、申請者の今後の研究課題となりうるであろう。

以上のように、申請者の学者としての将来性に対する大きな期待が表明された。それだけの期待を抱かせる本論文は、宗教学研究のみならず、戦後日本の精神史研究にも大きく寄与するものである。また、人間と社会の有機的連関に関する新しい学際的研究をめざして創設された人間社会論講座の文化社会論分野にふさわしい内容を備えている。なお本論文の第4章「〈日の神学〉か〈月の神学〉か——出口王仁三郎のスサノヲ神学」は第9回猿田彦大神フォーラム・みちひらき「研究/創生」助成事業において奨励賞（平成18年度）を獲得し、『あらはれ』（猿田彦大神フォーラム 年報）第10号（平成19年10月13日刊）に掲載された。それを読んだ一出版社の編集委員より、本学位論文に対してすでに出版の申し出がなされている。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、2008年10月9日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。